

やま した
山下遺跡

— 香南市新庁舎建設基本設計に基づく周辺駐車場整備事業に伴う発掘調査報告書 —

2019.12

香南市教育委員会

やま した
山下遺跡

— 香南市新庁舎建設基本設計に基づく周辺駐車場整備事業に伴う発掘調査報告書 —

2019.12

香南市教育委員会

序

本書は香南市新庁舎建設基本設計に基づく周辺駐車場整備事業に伴い、香南市教育委員会生涯学習課が平成 29 年度に発掘調査を実施した山下遺跡の発掘調査報告書です。

平成 18 年 3 月、旧香美郡赤岡町・香我美町・野市町・夜須町及び吉川村の 5 町村が合併し、香南市が誕生しました。新庁舎の整備は合併協議会での決定事項であり、これまで、新庁舎整備に向けて様々な議論が重ねられてきました。現在野市町西野では、これからの香南市にふさわしい庁舎の建設が着々と進んでいます。

今回の調査では主に中世の遺構や遺物が発見されました。香南市庁舎周辺で遺跡の本発掘調査が行われたのは初めてとなります。本書が地域史の研究に寄与し、地域の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、埋蔵文化財への深いご理解とご協力を賜りました地元の皆様方に心から謝意を表すと共に、発掘調査に従事して頂いた現場作業員の皆様方、報告書作成にあたりご指導ならびにご教示頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

令和元年 12 月

高知県香南市教育委員会
教育長 入野 博

例 言

1. 本書は、香南市新庁舎建設基本設計に基づく周辺駐車場整備事業に伴い、平成29年度に香南市教育委員会が実施した山下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 山下遺跡は、高知県香南市野市町東野タノ丸に所在する。
3. 発掘調査は約1カ月にわたって実施し、発掘調査延べ面積は、226㎡である。
4. 調査期間は、平成30年2月14日から同年3月26日にかけて発掘調査を行い、併せて基礎整理を平成30年度に行った。また、本報告書刊行及び整理業務を平成31年4月1日から令和元年12月27日にかけて実施した。
5. 発掘調査・整理作業時の香南市教育委員会生涯学習課の体制は以下の通りである。

平成29年度	課長	田中 彰裕	臨時職員	齋藤 美幸
	係長	寺内 より子		高橋 加奈
	主監調査員	松村 信博		宮本 幸子
	囑託員	宮地 啓介		吉本 由佳
		横山 藍		

平成30年度	課長	田中 彰裕	臨時職員	澤田 佐世
	係長	竹中 ちか		高橋 加奈
	主監調査員	松村 信博		高橋 由香
	囑託員	宮地 啓介		藤原 ゆみ
		横山 藍		松田 克純
				宮本 幸子

平成31年度	課長	小松 靖生	臨時職員	齋藤 美幸
	係長	竹中 ちか		澤田 佐世
	主監調査員	松村 信博		高橋 加奈
	囑託員	坂本 憲彦		高橋 由香
		宮地 啓介		藤方 正治
		横山 藍		藤原 ゆみ
				松田 克純
				宮本 幸子

6. 本書の執筆・編集及び写真撮影・遺構図版の作成は横山が行った。遺物実測及び図版作成は高橋加奈・松田克純が行った。
7. 遺構については、SB(掘立柱建物跡)・SA(欄列)・SK(土坑)・SD(溝)・P(ピット)とし、遺構番号は、必要に応じて通し番号を付した。掲載している遺構図の縮尺はSB・SAはS=1/40・S=1/100、SK・SD・PはS=1/40・S=1/80で作成しそれぞれに記載しており、方位(N)は世界標準座標方眼北である。
8. 遺物については、S=1/3とし、各遺物にはスケールバーを掲載している。
9. 航空写真については、香南ケーブルテレビに委託し業務を実施した。

10. 現場作業及び整理作業については下記の方々に行って頂いた。(敬称略、五十音順)

発掘調査作業

植田秀雄・大野久雄・川村正廣・宗圓良一・宮本幸子

整理作業

齋藤美幸・澤田佐世・高橋加奈・高橋由香・藤原ゆみ・松田克純・吉本由佳

また、報告書作成にあたっては、香南市文化財センターの諸氏の協力と援助を得た。

11. 出土遺物について、池澤俊幸氏・筒井三菜氏・松田尚則氏・吉成承三氏((公財)高知県埋蔵文化財センター)・藤方正治氏に助言を頂いた。記して感謝する。
12. 調査の実施にあたっては、地元の方々の絶大な協力と援助を得た。
13. 出土遺物の注記は、出土略号を17-10NYとし、図面・写真資料とともに香南市文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る契機と経過	1
1. 調査に至る契機と経過	1
2. 試掘調査の概要	2
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査成果	11
1. 調査の方法	11
2. 基本層序	12
3. 検出遺構と出土遺物	14
(1) 掘立柱建物跡	14
(2) 欄列	15
(3) ビット	15
(4) 土坑	16
(5) 溝	17
(6) 包含層出土遺物	20
第Ⅳ章 まとめ	21
1. 検出遺構の性格と変遷	21
(1) 遺構の性格と出土遺物の帰属時期	21
(2) 屋敷墓	21
2. 長宗我部地検帳にみえる中世の周辺景観と山下遺跡	22
(1) 新宮村・中山田村と大谷村	22
(2) 山下遺跡の位置付け	24

挿図目次

図1 香南市位置図	1
図2 試掘トレンチ位置図・柱状図	3
図3 山下遺跡周辺の地形図	5
図4 山下遺跡周辺の遺跡	6
図5 山下遺跡位置図	10
図6 調査区グリッド設定図	11
図7 調査区北壁セクション	12
図8 遺構配置図	13
図9 SB1遺構図・遺物実測図	14
図10 SB2遺構図	14
図11 SB2遺物実測図	15
図12 SA1遺構図	15
図13 P23遺物実測図	15
図14 P5遺構図・遺物実測図	15
図15 SK1～3遺構図	16
図16 SK1～3遺物実測図	16
図17 SD1・2遺構図・遺物実測図	17
図18 SD3・5遺構図	18
図19 SD3・5遺物実測図	19
図20 SD8遺構図	20
図21 包含層遺物実測図	20
図22 屋敷墓の分類	21
図23 中世の山下遺跡周辺の景観復元	22

遺構計測表目次

遺構計測表1 SB	27
遺構計測表2 SB1ピット	27
遺構計測表3 SB2ピット	27
遺構計測表4 SA	27
遺構計測表5 SA1ピット	27
遺構計測表6 ピット	28

遺構計測表7 SK	28
遺構計測表8 SD	28

遺物観察表目次

遺物観察表 1～20	31
遺物観察表 21～31	32

図版目次

図版1	遺構完掘状態(南東上空より)
図版2	調査前風景(北東より) 調査前風景(南西より)
図版3	遺構検出状態(南東より) 遺構検出状態(西より)
図版4	遺構完掘状態(東より) 遺構完掘状態(上空より)
図版5	遺構完掘状態(南東より) 遺構完掘状態(西より)
図版6	調査区北壁セクション(南西より) 調査区東壁セクション(北西より)
図版7	SK1検出状態(北より) SK1土師器手づくね皿(6～8)出土状態(南より)1 SK1土師器手づくね皿(6～8)出土状態(南より)2 SK1完掘状態(北より) SK2セクション(南より) SK2土師質土器杯(9・10)出土状態(南より)1 SK2土師質土器杯(9・10)出土状態(南より)2 SK2完掘状態(北より)
図版8	SK3セクション・土師器手づくね皿(11～13)出土状態(南より) SK3土師器手づくね皿(11～13)出土状態(北より) SK3土師器手づくね皿(11～13)出土状態(南より)

図版8 SK3完掘状態(北より)

SD1 a-a'バンクセクション(南より)

SD2 b-b'バンクセクション(南より)

SD3 a-a'バンクセクション(南より)

SD3 b-b'バンクセクション(南より)

図版9 SB2 P7 土師質土器杯(2・3)出土状態

P5 瓦質土器羽釜(4)出土状態

SD3 土師質土器皿(16)出土状態

SD3 土師質土器杯(19)出土状態

SD3 土師質土器杯(21)出土状態

SD3 土師質土器椀(24)出土状態

SD3 土師質土器皿または椀(25)出土状態

SD5 青磁皿または碗(29)出土状態

図版10 試掘トレンチ4北壁セクション(南より)

試掘トレンチ4完掘状態(南東より)

図版11 SB1・2、P5、P23、SK1 白磁(皿)、土師質土器(杯)、瓦質土器(羽釜)、石製品(石錘)、土師器(手づくね皿)

図版12 SK1～3、SD2 土師器(手づくね皿)、土師質土器(杯)、土師質土器(甕)

図版13 SD3 土師質土器(皿)、土師質土器(杯)

図版14 SD3 土師質土器(杯)、土師質土器(椀)、瓦器(椀)

図版15 SD3・5 包含層 白磁(椀)、土師質土器(椀)、青磁(碗か皿)、土師質土器(杯)、鉄製品

第 I 章 調査に至る契機と経過

1. 調査に至る契機と経過

平成18年3月、旧香美郡赤岡町・香我美町・野市町・夜須町及び吉川村の5町村が合併し、香南市が誕生した。平成17年2月より勤められた合併協議会で、野市町西野に所在する香南市役所本庁舎の整備について様々な意見が集約され、合併協定書が策定された。協定書には「庁舎の建設」として「本庁舎は本庁機能の充実を図るため、土地利用計画を作成、検討のうえ、現在の野市町庁舎を増改築することとする」と定められている。それに基づき、平成22年6月より「香南市庁舎建設等検討会」にて基本構想の策定が進められた。

平成22年6月から同23年7月には本庁舎の耐震診断及び耐震補強設計、大規模改修工事を実施し、耐震改修とともに不足分の庁舎増築を行う計画で基本構想の策定が実施された。その後同24年8月には再度本庁機能の充実を図るため、基本構想を改め土地利用計画等を「香南市まちづくりグランドデザイン」として策定し、これまでの庁舎建設計画の見直しが行われた。市民や職員に向けてのアンケートの実施や意見交換・説明会など、新庁舎や周辺の土地利用計画についての意見の集約が行われた上で、平成26年3月には土地利用計画等が盛り込まれた「香南市まちづくりグランドデザイン」報告書が刊行され、同年12月には市議会にて「香南市庁舎整備検討委員会条例」が承認された。

検討委員会では様々な角度から検討が行われ、合併から10年後の平成28年2月には「香南市新庁舎建設基本計画(案)」が策定された。平成19年に定められた「香南市振興計画」のまちづくりの基本理念に基づき、地域と市民のための新たな拠点づくりを推進するため、「環境にやさしい庁舎」・「まちづくりの拠点」・「市のシンボルとしての庁舎」・「堅ろう性・持続性を備えた防災拠点としての庁舎」・「だれもが利用しやすく充実したサービスを提供する庁舎」を基本方針としている。

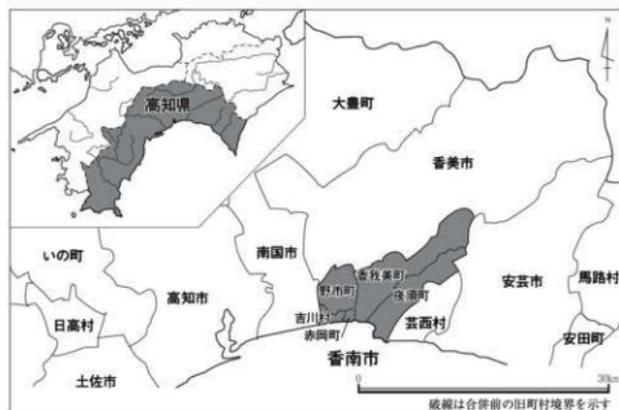


図1 香南市位置図

2. 試掘調査の概要

計画書では、現在の庁舎の耐震性能の不足や老朽化・駐車場の不足・各課機能の分散等の様々な問題が挙げられた。現庁舎は昭和55年11月に竣工したもので、耐震基準は旧基準によるものである。加えて災害への対応・市民サービスの充実・ユニバーサルデザインの導入・敷地及び執務空間の効率的活用・駐車場の確保・各課機能の集約と支所機能の充実といった取り組むべき課題が示され、山下遺跡が所在する岩松橋北東部周辺の耕作地は駐車場整備の計画地とされた。

当初、山下遺跡の埋蔵文化財包蔵地範囲は、本調査区より300m東に位置する東西150m、南北70mの山下公民館周辺であった。香南市教育委員会では「香南市新庁舎建設基本計画(案)」を受け、平成28年10月及び平成29年12月に埋蔵文化財包蔵地の周辺地として岩松橋北東部の試掘調査を実施した。試掘調査の結果遺構の広がりが確認されたため、関係各位との協議を行い、平成30年2月より駐車場整備により埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性がある本調査区の発掘調査を実施することとなった。なお、調査終了後は高知県教育委員会との協議の上、埋蔵文化財包蔵地の範囲を本調査区を西端とする東西150m、南北120mに拡大した。

2. 試掘調査の概要

試掘調査は平成28年10月11日にTR1、平成29年12月12～20日にTR2～6について実施した。岩松橋北東部、駐車場整備の計画地である耕作地を対象とした6か所である。以下に試掘トレンチの概要を記載する。

TR1

調査対象地中央に設定した約5m四方のトレンチである。現地表面下約20～30cmで遺物包含層及び遺構の所在を確認した。埋積土壌(黒ボク土層)と遺構埋土の識別が判然とせず、平面的な検出には至らなかったが、層位断面の観察によってピット状遺構の所在が明らかとなった。しかしながら遺構密度は西部と比較しても低い上に、近年の耕作に少なからず影響を受けており、遺構の残存状況は芳しくない。遺物包含層の出土遺物についても細片が多く同伴関係や層位による相対的な出土状況を把握できる資料は確認できなかったが、ロクロ成形で底部に回転糸切りの痕跡が見られる土師質土器片が出土した。

TR2

今次調査の対象となった西端の三角地の中央に設定した約4m四方のトレンチである。現地表下約20cmでピット・土坑・溝を検出した。当初、遺構検出標高は東部が低いものと考えられていたが、本調査のSD5の屑であったことが後に判明した。遺物包含層(Ⅲ層：暗オリーブ褐色粘土質シルト)は部分的な堆積のみで、遺物量も些少である。遺構検出面はⅣ層(黄褐色粘土質シルト)上面で、調査対象地西部よりも検出標高が高い。SD5の埋土から底部に回転糸切りの痕跡が見られる土師質土器供膳具4点と他細片が出土した。本調査を念頭に置き、遺構検出と一部の遺構掘削のみの調査にとどめた。TR2で検出したのは、Ⅲ章 調査成果で報告するSD1・SK2他である。

TR3

TR2の南壁を西へ延長し設定した幅1m、長さ12mのトレンチである。TR2より西側の遺物包含層は削平を受けているものとみられ、Ⅰ層の耕作土層の直下でピットを検出した。トレンチ西端で調査区南部の水路整備の際の攪乱を検出した。

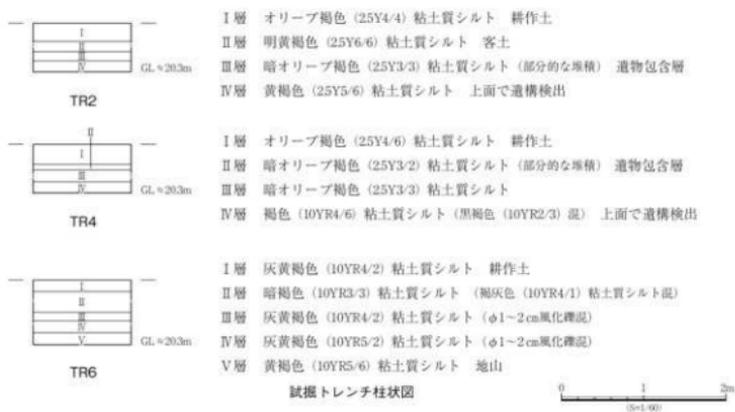
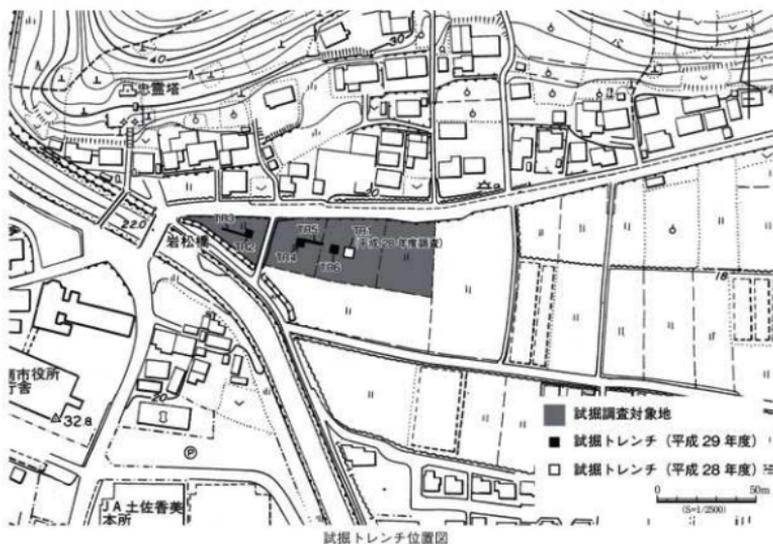


図2 試掘トレンチ位置図・柱状図

TR4

調査対象地中央やや西寄りに設定した4m四方のトレンチである。現地表下約25cmでビットと南北に延びる溝を確認した。遺物包含層(Ⅱ層：暗オリーブ褐色粘土質シルト)は主にトレンチ東部に堆積し、溝の埋土と同様であった。溝からは底部に回転糸切りの痕跡がみられる土師質土器供膳具2点と他細片が出土した。

TR5

TR4の北壁を東へ延長し設定した幅1m、長さ13mのトレンチである。TR4では遺構検出面であった褐色粘土質シルト層の上面、現表土より30cmの地点で所謂黒ボク土層の堆積を確認した。黒ボク土層の堆積はTR4との境目付近から厚くなり、TR5東端では約75cmを測る。TR1同様遺構埋土との識別が判然とせず、平面的な遺構検出には至らなかった。遺物包含層(Ⅱ層：暗オリーブ褐色粘土質シルト)は部分的に堆積がみられるが、トレンチ中央部以東では確認できない上に、出土遺物は些少で土師質土器の細片のみであった。

TR6

TR1の西部に隣接する4m四方のトレンチである。平成28年度に調査を行ったTR1の再確認のため設定した。堆積状況はTR1と同様で、遺構埋土の識別が判然とせず、黒ボク土層上面で遺構は確認できなかった。壁面観察では黒ボク土層上面からの掘り込みがみられたが、木根等の可能性も否定できない。TR1と同様に遺構密度は低く、近年の耕作の影響を受けているものと考えられる。

試掘調査の結果、本調査の対象となる西部三角地及び東側隣接区画で遺構を確認した。遺構密度は土坑や溝跡を確認した対象地西部は高く、東部は低い。特に西部のTR2及びTR3で検出した南北方向の溝は、屋敷地を区画する溝の可能性が考えられる。

遺物包含層については、調査対象地全体に部分的に残存し、全面的な堆積ではない。遺構密度と同様に対象地西部に比較的厚く堆積していた。出土遺物は土師質土器・須恵器が多くを占め、底部切り離し技法として回転糸切りを用いた土師質土器供膳具が数点出土した。

周辺駐車場整備事業では西部三角地において用水路擁壁の改修工事等が計画されていることから、先行して発掘調査の実施が決定した。

また、調査対象地南部に所在する用水路は、昭和30～40年代に改修されていることが知られており、その際に攪乱を受けていることが予測されていた。TR3の調査で、水路擁壁から北へ約4mの範囲が攪乱を受けていることを確認したため、本発掘調査では調査区南端を擁壁から約4mとし、以南を廃土置き場として使用することとした。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

山下遺跡が所在する香南市は、高知県中央部に広がる高知平野の東端に位置する。先述の通り平成18年3月1日に5町村(赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村)が合併して誕生した。東西約18km、南北約15km、面積約126km²で、東は安芸市・安芸郡芸西村、西は南国市、北は香美市に隣接し、県内三大河川のひとつ一級河川物部川の左岸に展開している。

物部川の運ぶ大量の土砂は、下流域に広い扇状地、香長平野を形成した。香南市の中心部である野市町は、香長平野の中央部、物部川の古期扇状地性堆積物である砂礫層からなる野市台地上に展開している。主な河川には西部に南流する物部川の他に東部の香宗川と同支流の山北川が挙げられる。物部川水系の堆積量が土居・中ノ村付近まで及び、香宗川と山北川は東部の香我美町内から西へ向かって流れ、この付近で向きを変え南流する。

平野部を囲む山地は、北部の秋葉山地、東部の香美山地・安芸山地で、これらの山地は海洋プレート沈み込みにより形成された付加体により構成される。秋葉山地は秩父帯南帯三宝山帯に属し、海溝充填堆積物である砂岩泥岩等と海洋性堆積物である石灰岩・チャートなどが混在している。香美山地から安芸山地にかけては四万十北帯に属しており、低地部は主に海溝充填堆積物である砂岩泥岩互層を基盤とし、香美山地・安芸山地については海洋地殻・遠洋性堆積物などのブロックが混在するメランジェ帯から構成される。

香南市の主な平野部は、野市台地・香宗川低地(野市町・香我美町)、夜須川低地(夜須町)、浜堤部(赤岡町・吉川村)からなり、野市町の市街地は台地の海拔高度約40～10mの台地上に展開する。西佐古・母代寺付近より南へ向かって次第に高さを減じ、西端は5m程の段丘崖となって戸板島橋東方で高度20m、下流の上岡付近で12mの沖積平地となっている。野市台地上には一般に火山性降下物(5500年前の九州鬼界ヶ島カルデラの爆発によると推定されている。所謂黒ボク土)が数cmの厚さで堆積するが、沖積平地面上にはみられない。

山下遺跡は、香長平野の北部、金剛山(三宝山)を含む標高300～600mの秋葉山地の南西麓、複数の緩傾斜の平坦面で構成される野市台地の中央部で、父養寺や深淵の段丘崖から延びる等高線の扇頂に位置する。台地上には香宗川水系の烏川、さらにその支流として上井川・下井川・瀬戸川があるが、烏川をのぞいた他は農業用水路として物部川より導水した人工水路である。



図3 山下遺跡周辺の地形図

2. 歴史的環境

高知平野における縄文時代以前の遺跡は些少である。香南市内では、手結遺跡で出土した有舌尖頭器(草創期)以外は、香宗川上流域で数例確認されるのみである。拝原遺跡で宿毛式・松ノ木式(後期前葉)と片粕式(同中葉)の土器片数点、十万遺跡で検出された貯蔵穴からは、晩期中葉とされる深鉢と黒色磨研浅鉢が出土している。更に上流の庭ヶ潤遺跡では、晩期末の刻目突帯文土器と遠賀川式土器が比較的多く出土している。



図4 山下遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代
1	烏ヶ森 城跡	城跡	中世
2	高田山城 城跡	城跡	中世
3	ノツゴ 遺跡	散布地	弥生
4	西佐古 遺跡	散布地	古代・中世
5	前ノ山城 城跡	城跡	中世
6	東佐古 遺跡	散布地	弥生・古墳
7	上分 古墳	古墳	古墳
8	小山谷 古墳	古墳	古墳
9	鬼ヶ岩 掘穴 遺跡	掘穴遺跡	弥生・中世
10	笹ヶ峰 遺跡	掘穴遺跡	弥生
11	白岩 遺跡	窯跡	古代・中世
12	アゴデン 窯跡	窯跡	古代
13	竹ノ内(黒山) 古墳	古墳	古墳
14	嵐山 窯跡	窯跡	弥生・古代・中世
15	日吉山 古墳群	古墳	古墳
16	又兼寺 城跡	城跡	中世
17	又兼寺 古墳	古墳	古墳
18	母代寺土居敷 遺跡	集落跡	古代・中世
19	城八幡 城跡	城跡	古墳
20	母代寺 遺跡	散布地	古代・中世
21	深岡北 遺跡	集落跡	弥生・中世
22	西上野 遺跡	散布地	弥生
23	大谷 城跡	城跡	中世
24	大谷 遺跡	散布地	古墳・古代
25	大谷 古墳	古墳	古墳
26	山下 遺跡	散布地	古代・中世
27	中山田土居 城跡	城跡	中世
28	鬼田柳ヶ本 遺跡	祭祀跡	弥生・古墳
29	鬼田八幡宮 遺跡	散布地	中世
30	西ノ谷 遺跡	散布地	古代・中世
31	大崎山 古墳	古墳	古墳
32	富家 城跡	城跡	中世
33	本村 遺跡	集落跡	弥生・中世
34	本村アンノヤシキ 遺跡	散布地	古代・中世
35	曾我 遺跡	集落跡	弥生・中世
36	香宗 城跡	散布地	中世
37	香宗 遺跡	散布地	中世
38	宝鏡寺 跡	寺跡	古代・中世
39	東野土居 遺跡	集落跡	旧石器・近世
40	東野 遺跡	散布地	古代・中世
41	甲井 遺跡	散布地	古墳・古代
42	深岡 城跡	城跡	中世

No.	遺跡名	種別	時代
43	深岡 遺跡	散布地	弥生・中世
44	西野 遺跡	集落跡	弥生・中世
45	北地 遺跡	集落跡	弥生・中世
46	下ノ坪 遺跡	集落跡	弥生・古代
47	上岡北 遺跡	堤防・集落跡	弥生・近世
48	上岡 遺跡	集落跡	弥生・古代
49	高田 遺跡	集落跡	弥生・中世
50	下高田 遺跡	集落跡	古代・中世
51	宇賀 遺跡	散布地	弥生・中世
52	下井 遺跡	散布地	古代・中世
53	八丁地 遺跡	集落跡	古代
54	横井ナノ丸 遺跡	散布地	中世・近世
55	横井ウノ丸 遺跡	集落跡	古代・中世
56	野口 遺跡	散布地	弥生・中世
57	射場屋敷 遺跡	集落跡	弥生・中世
58	吉原 遺跡	城跡	中世
59	八反 遺跡	散布地	中世
60	浜口 遺跡	散布地	弥生・古墳
61	南中曾 遺跡	散布地	弥生・古墳
62	住吉 移丘 遺跡	散布地	弥生
63	小原敷 遺跡	散布地	中世
64	ハザマ 遺跡	散布地	弥生・中世
65	新留田 城跡	城跡	中世
66	廣所の南 遺跡	散布地	弥生・中世
67	大東 遺跡	散布地	古墳・中世
68	江見 遺跡	散布地	古墳
69	岸本鬼舟社 西遺跡	集落跡	近世
70	岸本ヨノ丸 遺跡	散布地	中世
71	西坊 遺跡	散布地	中世
72	安岡家 住宅	居敷地	近世
73	岡ノ芝 遺跡	散布地	古墳・中世
74	宮ノ西 遺跡	集落跡	弥生・古墳
75	宮ノ前 遺跡	散布地	弥生・中世
76	前田 城跡	城跡	中世
77	下分 渡崎 遺跡	集落跡	弥生
78	中城 跡	城跡	中世
79	久保田 庵先 遺跡	集落跡	古代・中世
80	久保田 遺跡	集落跡	中世
81	刈谷 城跡	城跡	中世
82	園吉 城跡	城跡	中世
83	花室 遺跡	集落跡	弥生
84	徳王子 大崎 遺跡	集落跡	弥生・中世

弥生時代前期初頭には物部川右岸の田村遺跡群に拠点集落が成立し、周辺に広がる。弥生時代前期前葉・中葉の遺跡については物部川左岸西部には認められない。香宗川流域では、左岸に位置する徳ノ大崎遺跡で前期前葉及び同中葉の竪穴建物跡が、庭ヶ測遺跡では前期中葉の土器が出土している。前期後葉の遺跡には、香宗川流域の拝原遺跡・十万遺跡・徳王子広本遺跡・花室遺跡・下分遠崎遺跡が挙げられる。下分遠崎遺跡では楸・鋤などの木製品や炭化米・種子類や獣骨などが多量に出土し、中期中葉まで継続した。また前期後葉には、物部川流域においても西野遺跡群・上岡遺跡・北地遺跡が成立し、小規模な集落が増加する。西野遺跡群・上岡遺跡は前期後葉のみで廃絶するが、

北地遺跡は前期後葉から中期中葉と後期前半の堅穴建物跡が確認されている。中期前葉の堅穴建物跡からは除石・陽石が1点ずつ、後期前葉の堅穴建物跡からは青銅製の舶載鏡が出土し、貴重な資料となっている。北地遺跡・下分遠崎遺跡は当該時期において周辺の中心的な役割を果たす集落であったと考えられる。中期後葉になると、物部川右岸で田村遺跡の発展が始まるが、左岸では継続的な営みが行われる遺跡は確認されていない。後期前葉に登場する遺跡としては、下ノ坪遺跡・上岡北遺跡が挙げられる。下ノ坪遺跡では後期前葉・中葉の堅穴建物跡が15棟確認され、中でも約直径8mを測る大型建物跡からは、80点を超えるガラス製小玉が出土した。これらの遺跡は田村遺跡群が最盛期を迎える時期に並行し、田村遺跡群と共に後期中葉に終焉する。また中期中葉には、山麓部には高地性集落に位置付けられる本村遺跡・笹ヶ峰遺跡・鬼ヶ岩洞穴遺跡が出現する。笹ヶ峰遺跡は金剛山(三宝山)の標高230m程の中腹で、道路工事中に凹線文土器が出土している。本村遺跡では中期後葉から後期後葉までの堅穴建物跡・テラス状遺構・土坑などが確認されている。弥生時代後期後葉から古墳時代前期初めの遺跡として、深淵遺跡・拝原遺跡・十万遺跡・西野遺跡群・徳王子大崎遺跡・福山遺跡・稗地遺跡が挙げられる。西野遺跡群では、中広形銅矛の転用品が出土した。他の遺跡も含めて庄内式土器などの搬入品も見られ他地域との活発な交流がうかがえるが、集落数は古墳時代前期初め頃に減少する。

古墳時代前期では、拝原遺跡で古式土師器Ⅲ期の堅穴建物跡、徳王子広本遺跡で初期須恵器が確認されている。県内でも数少ない資料である。高知平野全体を総じて、前期古墳はほとんど例が見られないことは周知のとおりである。香我美町徳王子に所在する徳善天皇古墳は中期古墳とされているが、確証は得られていない。6世紀後半以降に作られた後期古墳については、口伝によるもので所在も含めて詳細が把握されていないものも多いが、発掘調査が行われたのは大崎山古墳・大谷古墳である。前者は金剛山(三宝山)の南西に派生した尾根に挟まれる谷部に所在する円墳で、玄室長5.4m、玄室幅1.9mを測り、高脚二段造高杯6点の他、耳環・玉類等が出土した。後者は丘陵端部に所在する円墳で、玄室長4.5m、玄室幅2.0mを測り、鉄製の馬具や刀子、耳環や玉類等が出土した。周辺の野市町佐古の丘陵部には竹ノ内古墳・日吉山古墳群・父養寺古墳群などが確認されている。古墳時代後期の遺跡については深淵遺跡・下ノ坪遺跡・西野遺跡群等が挙げられる。

古代(律令期)の遺跡としては、物部川左岸に所在する下ノ坪遺跡・深淵遺跡が挙げられる。コの字型に配列された大型の掘立柱建物跡が検出され、その規模は南四国で最大級である。硯や緑釉陶器火舎、丸竈などに加えて全国的にも希少な四仙騎獣八稜鏡が出土している。土坑(SK30)・溝(SD40)の一括資料は、律令期の土器様式の標識的資料となっている。深淵遺跡についても、円面硯・風字硯、墨書土器・刻書土器・二彩陶器・緑釉陶器及び蛇尾が出土していることから、両遺跡は官衙関連の遺跡として位置付けられている。また、深淵遺跡では瓦がまとまって出土し、約1km北東の河岸段丘上に位置する亀山窯跡との関連が示される。加えて、上流の深淵北遺跡では桶葉型黒色土器等の搬入品及び同安窯系青磁等の貿易陶磁多数が出土している。9世紀末から12世紀まで連綿と続く遺跡である。香宗川の上流域では、左岸に位置する十万遺跡からも8世紀代の掘立柱建物群が検出されている。下ノ坪遺跡と比較すると小規模ではあるが、整然とした配置は官衙に関連する建物群と考えられている。溝(SD2)からは石製の巡方が出土している。また、その他にも官衙関連の遺跡として、曾我遺跡を挙げることができる。昭和63年に行われた調査では、8世紀後半から10世紀代の掘立柱建物跡が9棟確認され、その内約半数は条里制に則している。位置及び活気の時期差から鑑みて十万遺

跡・曾我遺跡は、密接な関係性が指摘されている。香南市域の古代遺跡は、8世紀から9世紀代を中心とする官衙に関連する性格を持つものが主で、河川交通の要衝に展開する。

また、古代の窯跡は、徳善古窯跡群(香我美町徳王子)・アゴデン白岩窯跡(野市町佐古)・先述の亀山窯跡(野市町佐古)が挙げられる。徳善古窯跡群では、1号窯から7世紀末から8世紀前葉の須恵器杯身・杯蓋等が出土した。また2号窯では、縄目タタキ文が見られる布目瓦が出土した。亀山窯跡の瓦は、平安京大極殿・法勝寺に使用されていたとされており、官窯の性格を持つと考えられている。物流の面においても物部川の水運は、中央と繋がる重要な役割を果たしている。

『倭名類聚抄』(10世紀前半)には、香美郡内について、安濱・大忍・宗我・深淵・山田・石村・物部・田村の8郷が記されている。野市町及び香我美町は主に、大忍郷・宗我郷・深淵郷に属し、これらを原型とし鎌倉期に荘園が成立する。大忍荘は、鎌倉期は律宗寺院極楽寺、南北朝期は紀州熊野新宮が領主となり、香我美町の西川及び東川等の山間部と台地及び平野部、岸本・赤岡の一部を包含する。また、建久4年(1193)中原秋通は宗我郷・深淵郷の地頭に任命され、長岡郡宗我部に入った秦氏、後の長宗我部氏と区別するために香宗我部と名乗り、中世における香宗我部氏の発展が始まる。香宗川右岸の野市町土居には市史跡の香宗城跡が所在し、土塁の一部と八幡社が残存する。また周辺北部には同氏の菩提寺とされる宝鏡寺があり、五輪塔群と観音堂が残されている。

周辺の中世の遺跡としては、十万遺跡・東野土居遺跡でまとまった遺構と遺物が確認されている。香宗川左岸に位置する十万遺跡では、15世紀から16世紀にかけて全国的に出現する「重葺複郭式屋敷城」と位置づけられる建物群が検出された。これらの遺構は15世紀前葉には全て廃絶する。これが何に起因するものかは明らかではないが、当時は著しく在地勢力が台頭し、荘園制そのものを揺るがす構造的変質を遂げる時期とされている。十万遺跡の建物群は、領内の支配権と生産地代の維持、加えて軍事的な緊迫状態を示す拠点として位置付けられている。東野土居遺跡は香宗川右岸、香宗城跡の西部に隣接し、北部には香宗郷の総鎮守である立山神社が鎮座する。南国安芸道路建設に伴い平成21～23年度まで大規模な発掘調査が行われ、14世紀から16世紀の16区画の屋敷区画(区画溝・掘立柱建物跡・屋敷草・井戸等)が確認された。遺構の中心時期は15世紀代で、この頃活躍した香宗我部氏に関連した遺構である可能性が高い。

後述するが、山下遺跡の遺構は2時期に大分される。11世紀末から12世紀代と、14世紀末から16世紀代である。当時を知る資料について多くはないが、『吾妻鏡』には寿永元年(1182)9月25日の条に山下遺跡の西部に位置する野々宮についての記述がみられる。平治の乱の後、土佐国介良庄に流された源希義が平家方の追討を受けた際に救援に赴いた夜須行宗が、希義が敢死したとの知らせを受け野々宮より引き返した。この地点は「野々宮の森」として市指定の史跡となっている。野々宮の東部、金剛山(三宝山)の尾根に大谷と山下を繋ぐ旧道があり、行宗がこの道を通って野々宮に向かったと伝えられている。

現在、金剛山(三宝山)南西裾の平野部周辺は山下遺跡の他は周知の埋蔵文化財包蔵地とされていないが、長宗我部地検帳には東部の新宮村等、西部の大谷村に集落が展開していたことが記載されている。

近世における野市町域の開発は、一般に「野市の野開き」と呼ばれ、野中兼山の開発によることは広く知られている。それに先立ち、兼山の養父直継が野市町北西部の仁尾島・上野地区の開発を行った。烏川に原田堰を作り、東上野から西上野、深淵方面まで用水路(原田溝)を掘削し、付近を「新野町」とした。原田溝は野市地区では最古の用水路で、三叉付近で中断されていたものを後に兼山が利用

し、東上野方向に逆流させた。三叉は市の史跡に指定されている。西野・東野・下井地区は当時未開の原野で、兼山が開拓に着手したのは寛永18年(1641)である。兼山は基幹水路となる土佐山田町の中井堰(現上井堰)より三叉までの上井川、三叉より分水された十善寺溝・町溝・東野溝を掘削した。十善寺溝は三叉より南流し西野地区を南流して下井川へ、町溝は東流して野々宮神社付近から南へ、西野地区の東部・中部を感概し下井川へ合流する。東野溝は東流し烏川へ合流し一部は富家方面、主流は石家部落・東野地区・香宗地区を灌漑している。

兼山は開拓地に「市町」を作っているが、正保元年(1644)にそれまで「鏡野」と呼んでいた開拓地を「野市」と命名し、養父直継が創設した新野町を移転した。天保7年(1836)『支配中諸指図』には、開発地内の字名として西野分(上野・仁尾島・三ツ股⁽¹⁷⁾・野々宮・十善寺・北地・中筋・野田・二ツ股)・東野分(切石・山下・石谷・野地・長者ヶ窪・御墓所・岡田・平井・馬袋・烏川・鷹岡・山地・志里塚)・下井分(野神・宇賀・新道・横井・突溜・青木・八丁地・高田・櫻谷)が記され、概ねこれを踏襲し現在に至る。

参考文献

- | | |
|----------------------------------|-------------------------------|
| 野市町 1992『野市町史上巻』 | 香南市教育委員会 2011『北地道跡』 |
| 高知県立図書館 1962『長宗我部地検帳』 | 同 2008『上岡北道跡』 |
| 香我美町教育委員会 1993『拝原道跡』 | 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター |
| 同 1988『十万道跡発掘調査報告書』 | 2004『田村道跡群Ⅱ』 |
| 同 1989『下分遠崎道跡』 | 同 2010『花室道跡』 |
| 野市町教育委員会 2005『上岡道跡』 | 同 1997『下ノ坪道跡Ⅰ』 |
| 同 1993『野市町本村道跡調査報告書』 | 高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター |
| 同 1989『野市町深源道跡発掘調査報告書』 | 2013『徳王子大崎道跡』 |
| 同 1989『曾我道跡発掘調査報告書』 | 同 2014『徳王子広本道跡』 |
| 香南市教育委員会 2013『西野道跡ルノ丸地区2005年度調査』 | 同 2014『東野土居道跡』 |

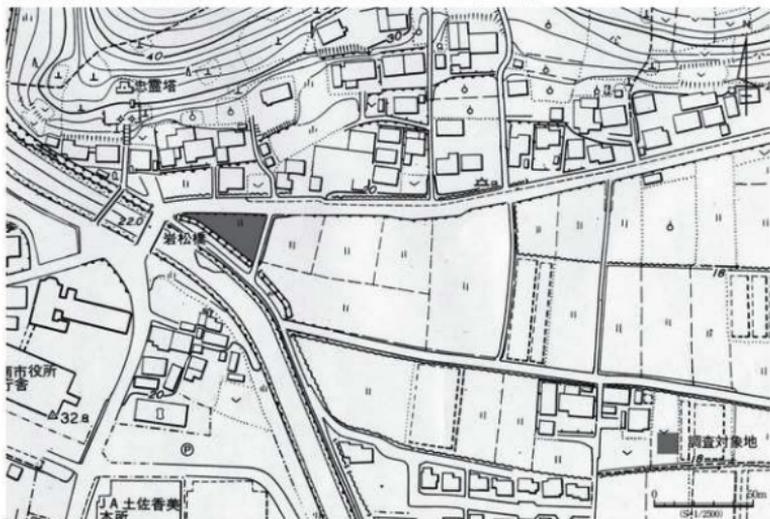


図5 山下道跡位置図

第三章 調査成果

1. 調査の方法

調査対象地の現況は耕作地であり、事前に行われた試掘調査の結果に基づいて調査を実施した。試掘調査の結果、調査区南部は隣接する水路の建設工事の際に攪乱を受けていることが判明したため、攪乱を受けている水路擁壁より約2m北を調査区の南端とし、調査区の設定を行った。調査面積は226㎡である。三角形形状を呈する調査区のため、調査区北壁を基準とする4m毎の任意のグリッドを設定し、それを元に遺構配置図を作成すると共に、包含層遺物の出土地点を記録した。

調査区を設定した後、重機による表土掘削を行った。遺物包含層は部分的に堆積が認められ、包含層掘削及び遺構検出は人力により作業を進めた。廃土は先述した調査区南部の水路擁壁沿いに仮置きし、埋め戻しの際に使用した。検出した遺構については、調査区全体の遺構検出写真を撮影し、遺構配置図の作成を行った。遺構掘削では、必要に応じて半載の上でセクション図の作成及び写真撮影を行うとともに、平面図(S=1/20)を作成し、標高を測量した。出土した遺物については必要に応じて出土状態の写真撮影・平面図及びセクション図(S=1/10)の作成、標高の測量を行った。

遺構完掘後は、調査区全体の平面図(S=1/20)を作成・標高を測量するとともに、完掘状態を写真撮影した。加えてドローンによる航空写真撮影を実施し、記録保存を図った。その後下層確認調査を行い、埋め戻し現状に復した。

調査成果について、地元を対象とした現地説明会を平成30年3月19日に予定していたが、雨天のため中止となり、次年度の5月29日に香南市文化財センターにて説明会を開催した。

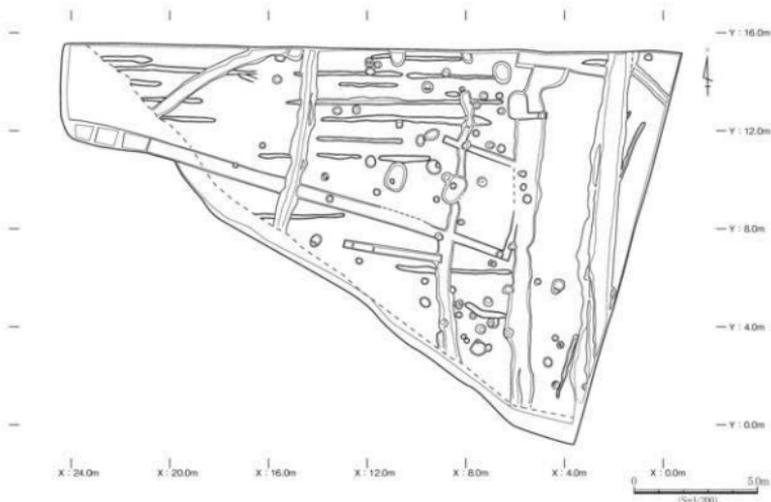


図6 調査区グリッド設定図

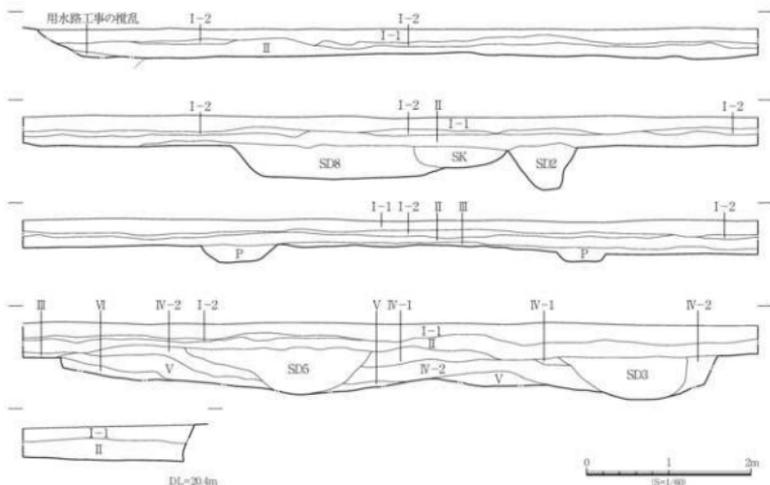
2. 基本層序

I層は暗オリーブ褐色を呈する粘土質シルト、II層は暗褐色を呈する粘土質シルトである。ともに調査区北壁の東端で用水路工事の攪乱上面に堆積している。調査区南部に位置する用水路工事が昭和40年代前半に行われていることから、I・II層とも近年使用された耕作土であると考えられる。

III層は黒褐色粘土質シルトで、遺物包含層である。主に調査区東部に部分的に分布し、全面的な堆積は認められなかった。出土遺物には底部に回転糸切り痕を持つ土師質土器供器具が見られ、概ね検出遺構と同時期のものと考えられる。

IV・V層は黒褐色を呈する粘土質シルトである。所謂黒ボク土であるが、水性堆積の影響がみられることから2次堆積の可能性を含む。遺構はIV層上面で検出した。検出遺構の帰属時期は概ね2時期、11世紀末から12世紀と14世紀末から16世紀前半で、いずれも同一面から検出されている。

VI層はにぶい黄褐色を呈する粘土質シルトで、1～3cmの角礫を含む。試掘調査では、本調査区より東進するほど検出標高が下がり、粘性が強い。基盤層とみられる。



- I-1層 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土質シルト 耕作土
 I-2層 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土質シルト (φ1cmの黄褐色角礫混) 耕作土
 II層 暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト
 III層 黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト 遺物包含層
 IV-1層 黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト
 IV-2層 黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト (やや粘性強い)
 V層 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト
 VI層 にぶい黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト (φ1～3cmの角礫混) 基盤層

図7 調査区北壁セクション

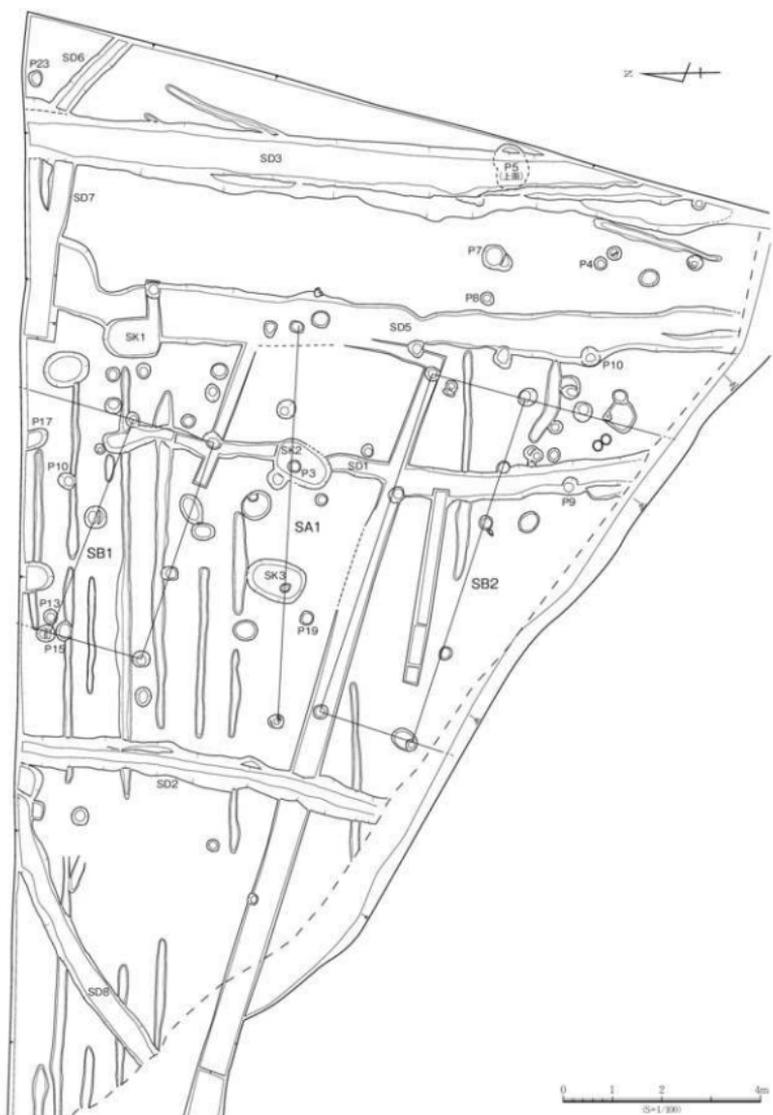


図8 遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

本調査では、掘立柱建物跡2棟・櫛列1列・ピット55個・土坑4基・溝7条を検出した。以下に特徴的な遺構について抽出し、記載する。遺構から出土した遺物は遺構図と併せて図示した。

その他の遺構は図8遺構配置図に図示し、出土遺物・規模については遺構計測表に記載した。

(1) 掘立柱建物跡

SB1

調査区中央北部で検出した桁行2間、梁行1間の東西棟側柱建物跡である。梁行は、調査区北部へ延長する可能性を含む。棟方向はN

-69°-Wを示す。標高19.96~20.02mで検出し、規模は桁行4.69m、梁行1.95m、柱間寸法は桁行1.87~2.80m、梁行1.69~1.95mを測る。床面積は9.14㎡である。柱穴は0.27~0.47mを測る円形または楕円形で、深さは0.25~0.35mである。P3・4で柱痕を検出した。埋土はP1・2・4がオリブ黒色粘土質シルト、P3が灰色粘土質シルト、P5が褐色に極暗褐色が混じる粘土質シルト、P6が褐色粘土質シルトである。P2~6から土師器細片、P4から白磁片が出土した。1は白磁の端反皿で、口縁部は外反する。

SB2

調査区中央南部で検出した桁行3間、梁行1間の東西棟側柱建物跡である。梁行は調査区南部へ延長する可能性を含む。棟方向はN-71°-Wを示し、SB1とほぼ同様である。標高19.94~20.00mで検出し、規模は桁行7.34m、梁行2.00m、柱間寸法は桁行1.92~2.78m、梁行1.95~2.00mを測る。床面積は14.68㎡である。柱穴は0.25~0.41mを測る円形または楕円形で、深さは0.19~0.38mである。P5で柱痕を検出した。埋土はP1~5・7がオリブ黒色粘土質シルトで、P6が褐色に極暗褐色が混

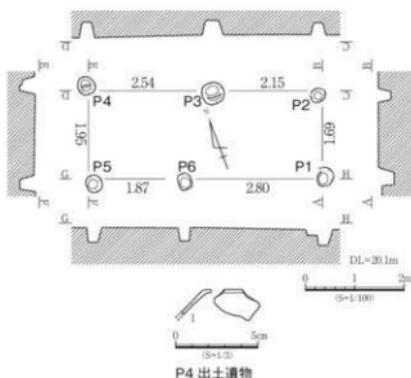


図9 SB1遺構図・遺物実測図

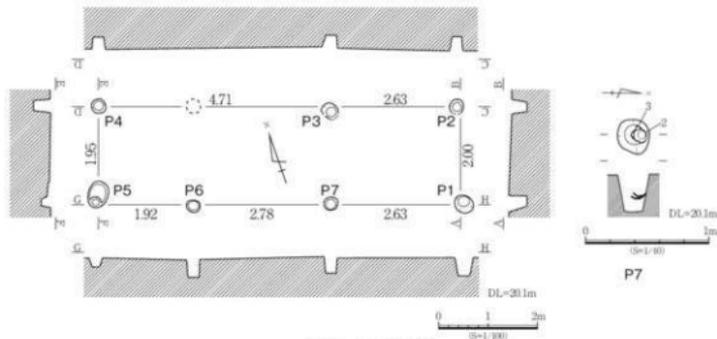


図10 SB2遺構図

じる粘土質シルトである。P2・4・6から土師器細片が出土した。また、P7からは土師質土器杯が2点重なった状態で出土した。いずれもロクロ成形で、底部切り離しは回転系切りである。2はやや歪な形状で、見込みに指によるナデ、外面底部に板状の圧痕が残る。3は器壁が厚く、見込みにロクロ目が残る。

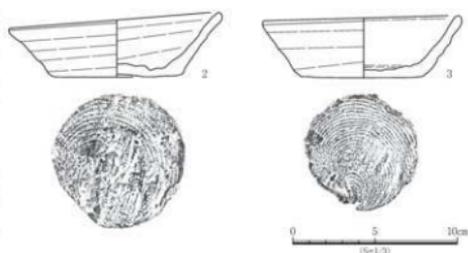


図11 SB2遺物実測図

(2) 柵列

SA1

調査区中央部に検出した全長8.11mの柵列である。検出標高は19.98～20.01mで、P2・3は後述するSK2・3の床面で検出した。主軸方向はN-85°-Wである。柱穴は径0.18～0.32mの円形または楕円形で、深さは0.14～0.22mを測る。P1では柱痕を検出した。埋土は全てオリーブ黒色粘土質シルトで、埋土中からは土師器細片が出土した。

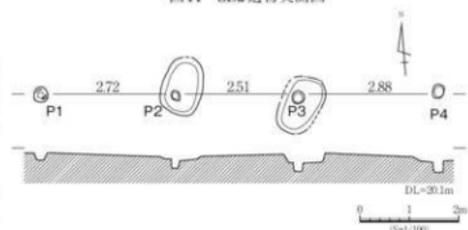


図12 SA1遺構図

(3) ビット

P5

調査区東部中央に位置する楕円形のビットで、後述するSD3の上面で検出した。長径0.60m、短径0.51m、深さ0.16mを測る。深さ0.14mの地点で、径0.41mの柱痕を検出した。柱痕西側のテラス状の地点で瓦質土器羽釜片が出土した。4は口縁部下に断面三角形の短い鈎が巡る。口縁端部は水平な平坦面状を呈する。その他に土師器細片、瓦質土器片が出土した。

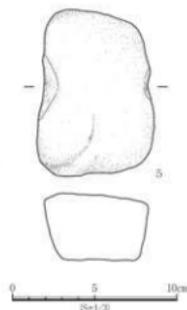


図13 P23遺物実測図

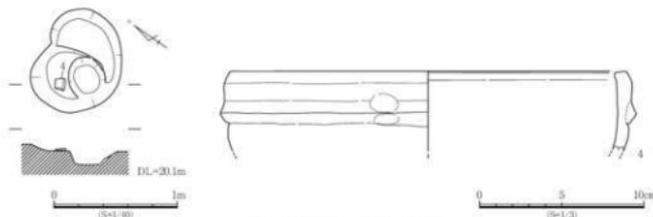


図14 P5遺構図・遺物実測図

P23

調査区北東部の隅で検出した円形のピットで、標高19.78mで検出した。長径0.33m、短径0.28m、深さ0.20mを測る。ピット床面で石鍾が出土した。5は砂岩製で長辺の2か所に挟りを有する。その他に、土師器細片が出土した。

(4) 土坑

SK1

調査区北部やや東寄りに位置する。主軸方向はN-3°-Wで、長径1.16m、短径0.77m、深さ0.21mを測る。埋土は褐色に極暗褐色が混じる粘土質シルトで、当初は後述するSD5の一部として検出した。検出標高は19.82~19.96mである。埋土中の土坑北東隅で3点の土師器手づくね皿が出土した。6~8はいずれも手づくね成形で、器面には丁寧なナデ・ユビオサエが施される。埋土中からは微細な骨片が出土した。

SK2

調査区中央部に位置する。主軸方向はN-31°-Eで、長径1.31m、短径0.80m、深さ0.18mを測る。検出標高は19.97~20.00mである。埋土は褐色粘土質シルトで、1~2cm大の明黄褐色礫及び灰色粘土が混じる。土坑南西隅で2点の土師質土器杯が出土した。9は器壁が厚く、口縁部が斜上方に直線的に延びるコップ状を呈する。器面は回転ナデ調整、底部切り離しは回転糸切りである。10の口縁部は斜上方に延び、口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。器面は回転ナデ調整、見込みにはロクロ目が残る。底径は4.0cmと比較的小さく、底部切り離しは回転糸切りである。

SK3

調査区中央部に位置する。主軸方向はN-22°-Eで、長径1.22m、短径0.79m、深さ0.10mを測る。検出標高は19.93~19.98mである。埋土は暗褐色粘土質シルトで、1~2cm大



図15 SK1~3遺構図



図16 SK1~3遺物実測図

の明黄褐色礫及び灰色粘土が混じる。土坑南東隅で3点の土師器手づくね皿が出土した。11～13はいずれも手づくね成形で、器面には丁寧なナデ・ユビオサエが施される。13は見込みの中央に径8mmの円礫が埋め込まれる。その他に埋土中から土師器細片が出土した。

(5) 溝

SD1

調査区中央部に位置する。南北方向に延び、調査区外へと続く。主軸方向は $N-2-10^{\circ}-W$ で、幅0.30～0.80m、全長10.40m以上、深さ0.07～0.20mを測る。断面形は逆台形状を呈す。検出標高は19.97～19.99mで、埋土は極暗褐色粘土質シルトと極暗褐色に暗褐色が混じる粘土質シルトである。埋土中から土師器細片が出土した。

SD2

調査区中央部西寄りに位置する。南北方向に延び、調査区南北へと続く。主軸方向は $N-9-14^{\circ}-E$ で、幅0.54～0.77m、全長7.30m以上、深さ0.26～0.33mを測る。断面形はV字状を呈し、一段を有する。検出標高は19.99～20.01mで、

埋土は暗褐色粘土質シルトに灰色粘土が混じる。埋土中から土師器底部片・土師器甕片・土師器細片・須恵器片が出土した。図示した14は土師質土器甕の口縁部で、口縁端部は内面側に肥厚し、丸く収める。内面・外面とも横方向のナデ調整が施される。

SD3

調査区東端に位置する。南北方向に延び、調査区南北へと続く。主軸方向は $N-5^{\circ}-E$ で、幅1.26～1.50m、全長10.70m以上、深さ0.32～0.73mを測る。標高19.94～19.96mで検出した。断面形は逆台形状を呈し、西側にテラス状の段を有する。埋土は図示した通りである。埋土中から土師質土器皿・杯・底部片他細片・須恵器片・瓦質土器片が出土した。

15～25は土師質土器である。15は口径7.8cmの小型の皿で、外面底部と体部の境は回転ナデにより凹状になる。底部切り離しは回転糸切りである。16も口径7.9cmの小型の皿で、底部切り離しは回転

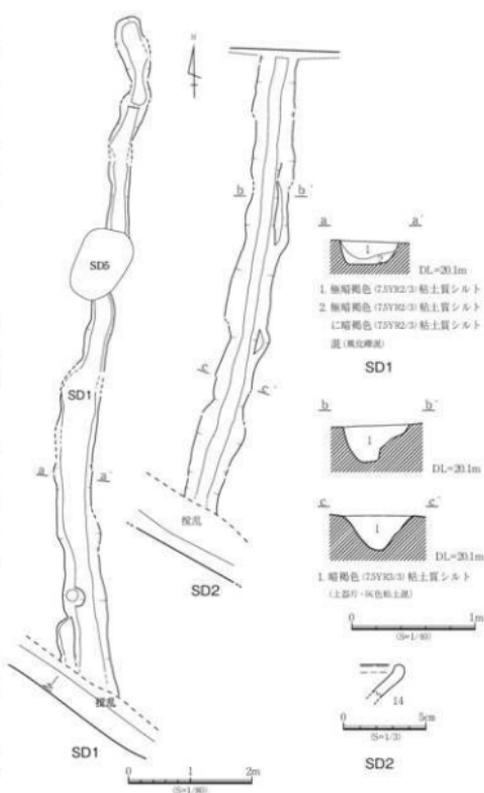


図17 SD1・2遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

糸切りである。17～23は杯である。17は、外面体部にロクロ目を残すが摩耗著しく調整は不明瞭である。18も摩耗著しく調整は不明瞭であるが、底部切り離しは回転糸切りである。19は、底部から口縁部は直線的に延び、端部は丸く取める。底部切り離しは回転糸切りである。20は底部と体部の境目が回転ナデにより僅かに凹状になる。摩耗著しいが、外面底部に僅かに回転糸切りの痕跡が残る。

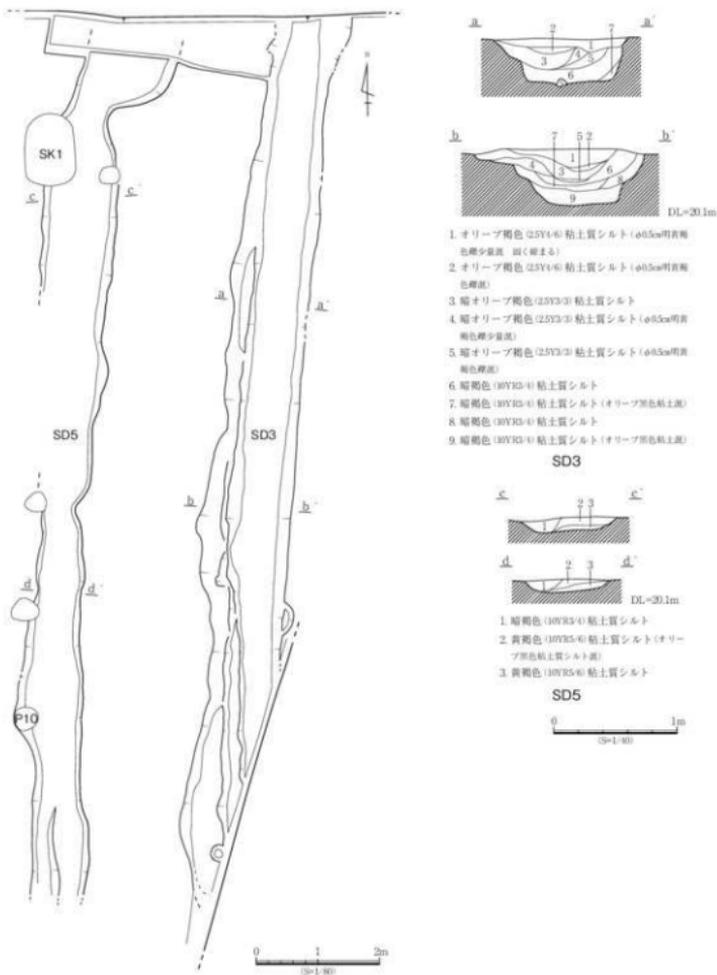
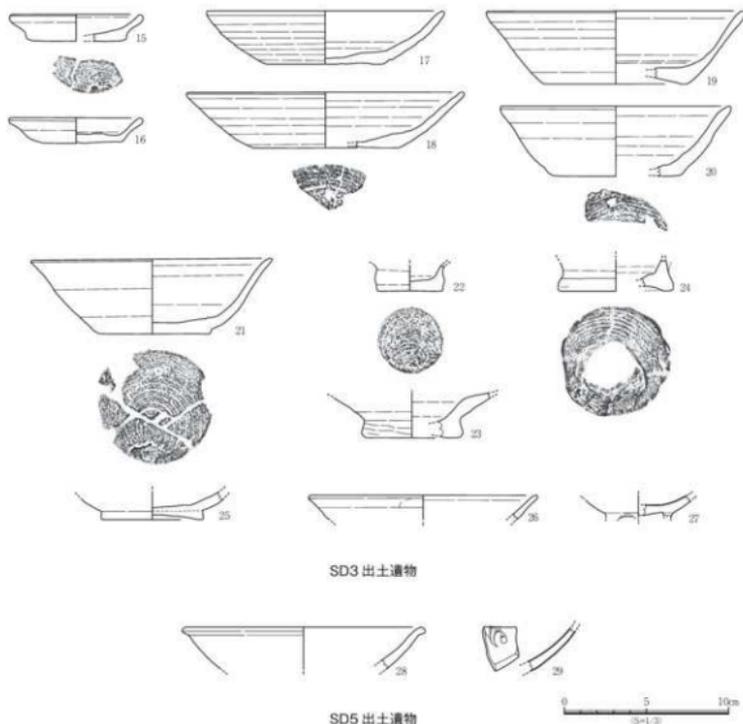


図18 SD3・5遺構図



SD3 出土遺物

SD5 出土遺物

図19 SD3・5遺物実測図

21の口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。外面底部と体部の境目が部分的に段状を呈し、底部切り離しは回転糸切りである。22は杯の高台部である。外面は回転ナデ調整で、底部切り離しは回転糸切りである。23の見込みは凹状を呈する。摩耗著しい。24は碗の底部で、中央に径2～2.5cmの焼成後穿孔が見られる。底部切り離しは回転糸切りである。25は皿または碗の底部である。摩耗著しいが外面底部に回転糸切りの痕跡が残る。

26は瓦器碗の口縁部である。口縁端部は丸く収め、器面にはナデ・エビオサエによる調整が見られる。27は白磁碗の底部である。残存部の高台裏に2か所の抉りを有する。

SD5

調査区中央部に位置する。南北方向に延び、調査区南北へと続く。主軸方向はN-2°-Eで、幅0.49～0.56m、全長13.80m以上、深さ0.08～0.12mを測る。SD3と平行しているが、断面形は浅い皿状である。検出標高は19.94～19.96mで、埋土は暗褐色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルトである。埋土中から土師器口縁部片・杯底部片・脚部片・細片、須恵器片、青磁碗片、瓦質土器脚部片が出土した。

3. 検出遺構と出土遺物

28は土師質土器碗で、口縁部が緩やかに外反する。端部は外面側に肥厚し丸く取める。摩擦が著しく調整は不明瞭である。29は青磁皿または碗の体部片で、内面・外面に灰オリーブ色の釉が施され、内面に劃花文が描かれる。

SD8

調査区西部に位置する。南西から北東方向に延び、調査区外へと続く。主軸方向は $N-59^{\circ}-E$ で、他とは異なる。幅0.50～0.65m、全長9.28m以上、深さ0.18～0.24mを測り、断面形はU字状を呈する。検出標高は19.96～20.01mで、埋土は暗褐色粘土質シルト・オリーブ褐色粘土質シルト・暗オリーブ褐色粘土質シルトである。埋土中から土師器細片が出土した。

(6) 包含層出土遺物

包含層からは、土師質土器杯1点・土師質土器底部片10点・土師器細片123点・近世磁器片1点・須恵器片1点・鑿状鉄製品1点・砂岩剥離片1点が出土した。先述の通り包含層は調査区東部に部分的に堆積するのみであった。細片が多くを占めるが、2点を図示した。

30は土師質土器杯である。口縁部は回転ナデ調整で、外面体部はロクロ目が残る。見込みに指によるナデが施される。外面底部周縁に回転糸切りの痕跡が残る。31は鑿状の鉄製品である。扁平な棒状で、一方は匙状で他方は鑿状に尖る。

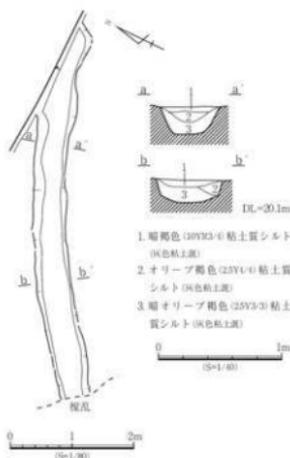


図20 SD8遺構図

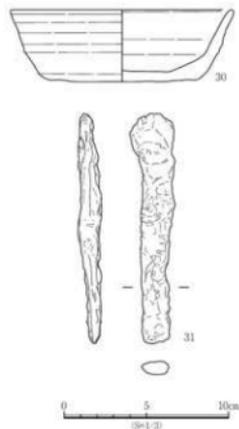


図21 包含層遺物実測図

第四章 まとめ

1. 検出遺構の性格と変遷

(1) 遺構の性格と出土遺物の帰属時期

今回の調査では狭小な調査区にも拘らず、各遺構より良好な一括資料が得られた。出土遺物の中心的な時期は11～13世紀(I期)及び14世紀末から16世紀(II期)の大きく2時期である。

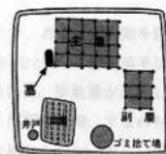
11～13世紀を中心とするI期の遺物は全てSD3・5から出土した。調査区東部で南北に延びる並行する2条の溝である。特にSD3は、その規模から区画溝の可能性を示し、包含する遺物量も多い。土師質土器の小型皿の法量及び杯の形状から概ね11～12世紀が主体である。和泉型瓦器碗(13世紀)・切高台の白磁碗(15世紀後半)もみられるが、全体の比率としては些少である。SD3は11～12世紀を中心時期とする。本調査区内では、この時期に機能していたとみられるのはSD3・5の他に、遺物から帰属時期は判断できないが同様の主軸方向を持つSD1・横列(SA1)が挙げられる。後述する土坑との切り合い関係からも矛盾はみられない。また、SD3を切るP5からは14～15世紀前半の瓦質土器羽釜が出土した。

14世紀末以降に成立したとみられるII期の掘立柱建物は2棟である。SB2のピットから出土した土師質土器杯(2・3)は15世紀代のもので、柱を抜き取った後に埋納された遺物である。SB1・2は、位置関係及び主軸方向から、同時期に機能していたとみられる。

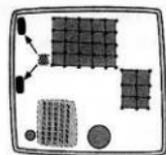
土坑はSK1～3の3基が確認され、その内SK1は埋土に微細な骨片を含んでいた。3基とも平面楕円形状を呈し、隅部に2ないし3点の土師器皿又は土師質土器杯が埋納されていた。遺物出土状況から3基とも土坑墓の可能性が高い。SK2から出土した土師質土器杯は15～16世紀¹⁾に位置付けられる。SK1及びSK3から出土した土師器皿については詳細な年代特定はできなかったが、法量・製作技法ともに顕著な差はみられない。また、SK2とSK3についてはその位置関係及び遺構埋土から大きな時期差はないものとみられ、この3基は概ね15～16世紀に位置付けられると考えられる。出土遺物は掘立柱建物は建物の廃絶時、土坑墓の成立時に埋納されたとして捉えられることから、II期の早い段階で建物群が成立し、終焉を迎える頃に屋敷に伴う土坑墓が出現したと考えるのが妥当である。

(2) 屋敷墓

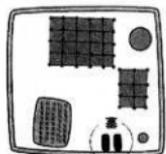
屋敷墓は、『日本の中世墓』の中で「屋敷の中に墓を作り祖先(屋敷創設者)祭祀を行うことによって屋敷相続の正当性、つまり屋敷所有の強化・自立の象徴としての機能を担うもの」と定義されている。山下遺跡で確認された土坑墓は、建物の位置関係及び埋納時期から屋敷墓として位置付けることができよう²⁾。SK1については建物跡との位置関係より屋敷墓1類³⁾又は2類⁴⁾に属すると思われる。SK2及び3については3類⁵⁾に該当するとみられる。遺体の性別は男女とされているが、埋納遺物等から性差を判別



屋敷墓1類



屋敷墓2類



屋敷墓3類

図22 屋敷墓の分類
(『日本の中世墓』より転載)

することはできなかった。

前述の通り屋敷墓は、「屋敷所有の強化・自立の象徴」の機能を持つとされる。今回の調査区では屋敷の廃絶時期と大きな時期差なく屋敷墓が造成されたが、出土遺物からみて以降に屋敷地として使用された形跡は確認されていない。16世紀以降の遺物が包含層等から出土していないことから、屋敷地は廃絶したと考えられる。

2. 長宗我部地検帳にみえる中世の周辺景観と山下遺跡

(1) 新宮村・中山田村と大谷村

山下遺跡周辺の「長宗我部地検帳」の「大忍庄地検帳」⁽⁶⁾に収められている。新宮村の検地は天正16年(1519)3月26・27日に行われた。「土佐国香我美郡香宗分御地検帳」の冒頭に記録されており、香宗我部氏の所領のためその家臣の給地が多い。出発地である「新宮宮ノ前」には香宗我部氏の家臣である「別当分池内六兵衛給」の記載がみられ、その他に「介衛門」「永田藤兵衛」などのヤシキも点在する。検地は、現在の新宮地区、熊野神社の南部にホノギが残る「新宮宮ノ前」より開始され、次地点には「新宮御宮床」として「五社横殿四間カヤフキ」の本殿が記録されている。ヤシキは、上ヤシキ1・中ヤシキ14・下ヤシキ及び下々ヤシキ他45がみられるが、東部に進むにつれて隣接する中山田村の中山田左衛門佐泰吉のヤシキが多くを占める。上ヤシキは、現在もホノギが残る「土居屋敷」に位置し、中山田左衛門佐泰吉の居住地である。泰吉は香宗我部秀通の子で重臣として活躍した。28日の項より「中山田村 中山田左衛門介給」の記載が見られるが、実質の境界は土居屋敷周辺であったと思われる。同村には上ヤシキ3・中ヤシキ2・下ヤシキ21が記載され、その内上ヤシキ1・中ヤシキ1・下ヤシキ6

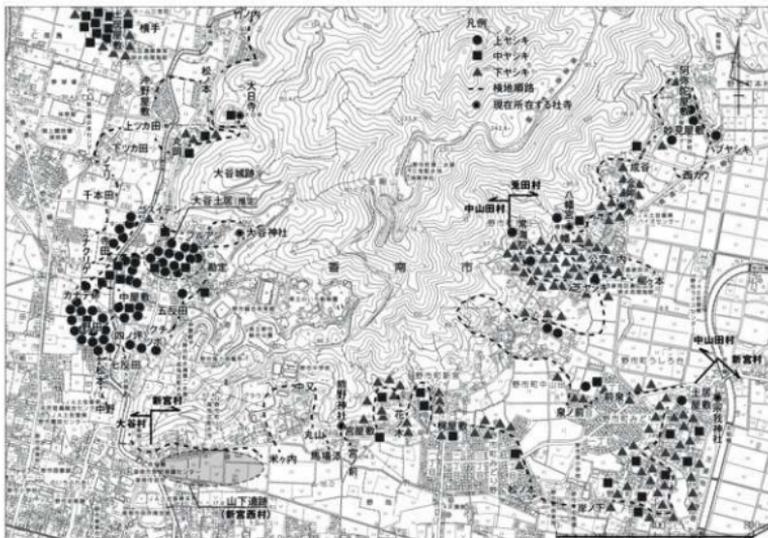


図23 中世の山下遺跡周辺の景観復元

が土居屋敷周辺に集中している。また、周辺には御用ヤシキ・東ヤシキ・後ヤシキなどがあり、当時の屋敷の配置構成がみてとれる。

検地はその後山裾を東進する。中山田村と兎田村の境界は現在も残る兎田八幡宮西部の常海院というホノギの谷奥である。地検帳には常海院または常海寺と記載され、この谷に21のヤシキが集中する。常海寺領が多いが他にも八幡宮領、中山田左衛門佐泰吉の領地も見られる。谷の西部中腹には八幡宮が鎮座し、「御八幡宮宮床」として「東本社 一間四方」「本社面 九尺横二間上之御宮横殿二間五間かやふき也」「西ノ本社 五尺間四方」の3棟の存在が記録されている。周辺には13のヤシキが集中している。八幡宮の上には上ヤシキ・寺中ヤシキがあり、「西連寺」という寺院があるが、これは森田民部の給地となっている。森田民部は香宗我部氏の有力家臣とされ、一段三五代の広大な上ヤシキを給地としている。この一帯ほとんどがこの森田民部など香宗我部氏の家臣の給地であるが、この内東山裾には「金剛(剛)寺寺中」も見られる。兎田村には上ヤシキ2・中ヤシキ3・下ヤシキ31が分布する。更に東部には阿弥陀寺村が所在する。現在の三宝山トンネルの東側の谷にある中ヤシキ4・下ヤシキ1の小集落である。

ここまでが新宮村より東部阿弥陀寺村まで、28日から晦日の記録である。合計は「本田 30町4反1代1歩勾 出分 8町9反4代1歩 本ヤシキ 8町3反28代5歩 同出分 3町5反32代1分 本畠 4段3代」、内訳は「上々田 1町3反19代2歩 上田 11町8反3代1分 中田 10町7反39代3歩 下田 8町9反32代 下々田 5町9反34代3歩 上ヤシキ 9町25代3歩勾 中ヤシキ 2町9反32代2歩 下ヤシキ 5町4段1代5歩 下々ヤシキ 2町8反9代3歩 中畠 1段15代 下畠 5段3代⁶⁾である。

山下地区は新宮村の西部に所在し、大谷村との境界に位置する。新宮村に属す新宮西村として大谷村と合わせて9月11日から行われた。表紙は「東深淵御地検帳」である。

検地は「香宗新宮ト大谷分ト大塚ヨリ」開始されている。ホノギは「馬場ソエ」で、先述した「新宮宮の前」とともに現在も確認することができる。現況のホノギでは、「馬場添」「丸山」「中又」「米ヶ内」の順で西へと検地が行われている。先述した新宮村と同じく香宗我部氏の家臣である池内六兵衛など池内一族の給地が多い。

ところで、新宮村西部・新宮西村・大谷村には「大谷御成敗之節御加扶持」の記載が多く見られる。これは、長宗我部国親の山田氏討伐により、山田氏に属していた大谷氏が滅び、大谷氏の所領が長宗我部・香宗我部氏の家臣に配分された事を示している。

ここまでは「新宮村」との記載がある。この後に新宮西村の検地に続くが、「大塚之事」として大谷村との境界についての記述が見られ、東西の境界は立石から上岡の後の近藤基⁷⁾を見た線が堺とされている。立石と呼ばれる巨石は、現在の山下と野市町分の境界にある石の事を指し、現在も金剛山(三宝山)の南東麓に残されている。

新宮西村は現在の山下遺跡周辺にあたる。検地は「上山崎コメノ西」から始まり、「六反田東ノ小田」などのホノギが見られるが、現況では詳細な位置の確認は困難である。大谷村との境界までの間には「定芝」が多く見られる。「定芝」は長宗我部氏の開発予定地を示す。ヤシキは見られず、「定芝」及び耕作地が大半を占める。新宮西村の東端も「定芝」とされ、今次発掘調査が行われたのはこの付近に相当すると考えられる。これより東は大谷村である。

大谷村の検地は、新宮西村との堺から金剛山(三宝山)の南西山裾を北上する。現況に対応するホノギは「中野」に至るまで確認できないが、新宮西村と同様に「大谷御成敗之節御加扶持」と「定芝」が多

く見られる。「中野」から北部の「七反田」までの間にヤシキは見られず、新宮村西部・新宮西村と同じ様相を呈している。屋敷地となるのは「四ノ坪」・「クチノツボ」といった古代の条里に関連するホノギが残る地点で、現在は「中ノ坪」¹⁾となっている。上ヤシキが3箇所記されている。その後も山裾を北上し検地が進み、「大谷御成敗之節御加持」の地点が多く見られ耕作地が大半を占めるが、現況はホノギと対応せず詳細な位置は不明である。「野田」「中屋敷」「カナデン」から「大谷土居」にかけては上ヤシキ39・中ヤシキ8が集中する。「大谷土居」は先述の大谷氏の土居であった地点で、現在背面の谷奥には大谷神社が鎮座する。「大谷土居」周辺には土居の堀を埋めた「ホリタオシ」の記載があり、長宗我部氏が直轄し島内介衛門の扣地となっている。その他にも「二ノ堀」など土居に関連するホノギも見られる。その北部には大日寺の南部の薬師谷に中ヤシキ3・下ヤシキ4があり、これらは大日寺の寺領となっている。また大日寺の北西部、「土居屋敷」のホノギが残る周辺は中ヤシキ12・下ヤシキ7が集中する。「薬師堂床」「北上院」の記載が見られるが、詳細は不明である²⁾。

(2) 山下遺跡の位置付け

出土遺物の帰属時期と屋敷墓の「屋敷所有の強化・自立の象徴」の機能的位置付けについて前節で述べたが、屋敷墓の成立の後、連続と続くはずの屋敷地が直後に廃絶したことに齟齬があると言わざるを得ない。ここまで、「長宗我部地検帳」で周辺の景観の考察を行った結果、屋敷地が断絶した一つの可能性として、長宗我部国親の山田氏討伐により大谷氏の所領が長宗我部・香宗我部氏の家臣に配分されたことが挙げられると考えている。今回の調査区に比定される地点は開発予定地とされる「定芝」にあり、近隣に「大谷御成敗之節御加持」の地点も多く、周辺は当時、土地利用の変換の過渡期であったことが伺える。山下遺跡の居住者が屋敷所有の継続を望み屋敷墓を造成した直後に長宗我部氏による山田氏討伐が行われ、大谷氏に関連する住人が転居を余儀なくされた。些か強引ではあるが、可能性の一つとして今後周辺景観の考察を行う際の材料となれば幸いである。

補注

- (1) (公財)高知県埋蔵文化財センター松田尚則氏・吉成承三氏のご教示による。
- (2) 「中世の屋敷墓」では屋敷墓を認定する作業として①集落から検出され、しかもその集落の存続期間中に造営されたもの ②個々の建物群との配置などから密接な関係が想定されるもの ③建物群と墳墓が同時期のものなどが条件として挙げられている。
- (3) 1類 建物に沿って墓を作る。墓の内容は同じ集落でも屋敷によって全く異なる。いずれの場合も建物重視の発想が読み取れる。
- (4) 2類 屋敷の周辺に巡らせた区画溝の周辺に墓を作る。屋敷墓に視覚的效果を求めており、土地重視に意識が変化している。
- (5) 3類 立地は2類と同じだが、墓穴の向きを揃え1m程度の間隔で2基が並列する。遺体の性別は男女となるが、時期差がある。墓における列状配置が出現する。
- (6) 「長宗我部地検帳」に記載された数字をアラビア数字に置き換えた。
- (7) 「野市町史」では「近藤墓については不明だが、上岡の後にみえる何か目標となるものであろうが」と記載されている。
- (8) 「野市町史」では大谷四ノ坪とクチノツボが合体し中ノ坪となったとされている。
- (9) 「ヤシキ」と「屋敷」、現況ホノギと地検帳記載のホノギなどの仮名遣いは、可能な限り参考文献に準じた。

引用・参考文献

- 狭川真一 2009 『日本の中世墓』
 野市町 1992 『野市町史 上巻』
 高知県立図書館 1962 『長宗我部地検帳』
 日本中世土器研究会 2000 『中世土器の基礎研究XV』
 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』

遺構計測表

遺構計測表1 SB

遺構名	棟方位	平面規模	総長 (m)	面積 (㎡)	柱間寸法 (m)	柱径 (m)	備考
SB1	N-69°-W	桁行2間	469	914	187～280	0.07～0.20	
		梁行1間	195		169～195		
SB2	N-71°-W	桁行3間	734	1468	192～278	0.13～0.22	
		梁行1間	200		195～200		

遺構計測表2 SBIピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
P1	169 (P2)	0.39	0.30	0.32	円形	-	
P2	215 (P3)	0.31	0.27	0.25	円形	土師器細片3	
P3	254 (P4)	0.47	0.45	0.35	円形	土師器細片1	
P4	195 (P5)	0.37	0.35	0.28	円形	土師器細片11 白磁底部片1	
P5	187 (P6)	0.36	0.33	0.31	円形	土師器細片15	
P6	280 (P7)	0.34	0.27	0.28	楕円形	土師器底部片2	

遺構計測表3 SB2ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
P1	200 (P2)	0.41	0.34	0.38	楕円形	-	
P2	263 (P3)	0.30	0.27	0.25	楕円形	土師器細片4	
P3	471 (P4)	0.34	0.30	0.38	楕円形	-	
P4	195 (P5)	0.36	0.30	0.25	円形	土師器細片2	
P5	192 (P6)	0.37	0.37	0.29	円形	-	柱径径0.13m
P6	278 (P7)	0.28	0.25	0.36	円形	土師器底部片1	
P7	263 (P8)	0.30	0.26	0.19	円形	土師貫土器杯2	

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表4 SA

遺構名	主軸方位	柱穴数	総長 (m)	柱間寸法 (m)	柱径 (m)	備考
SA1	N-85°-W	4	811	251～288	0.18～0.32	

遺構計測表5 SA1ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
P1	272 (P2)	0.32	0.29	0.14	円形	-	
P2	251 (P3)	0.23	0.18	0.19	不整形	-	
P3	288 (P4)	0.26	0.25	0.18	円形	土師器細片1	
P4	-	0.28	0.23	0.22	楕円形	土師器細片8	

※柱間距離は()のピットまでの距離

遺構計測表6 ビット

遺構番号	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P4	0.27	0.26	0.28	円形	土師器細片 5	
P5	0.60	0.51	0.16	楕円形	土師器細片 26 瓦質土器羽釜片 2 瓦質土器片 4	柱直径 0.41m
P7	0.50	0.45	0.20	円形	土師器細片 10	
P8	0.29	0.26	0.08	円形	土師器細片 3	
P9	0.41	0.30	0.22	楕円形	土師器細片 2	
P10	0.36	0.32	0.44	円形	土師器底部片 2	
P13	0.30	0.27	0.12	円形	土師器細片 2	
P15	0.40	0.34	0.08	楕円形	土師器細片 5	
P17	(0.45)	0.38	0.07	楕円形	土師器底部片 1 土師器細片 3	
P19	0.28	0.25	0.26	円形	土師器細片 40	
P23	0.33	0.28	0.20	円形	土師器細片 1 石鉢 1	
P24	0.40	0.37	0.17	円形	-	

遺構計測表7 SK

遺構番号	主軸方向	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 3° - W	1.16	0.77	0.21	楕円形	土師器手づくね皿 3	
SK2	N - 31° - E	1.31	0.80	0.18	楕円形	土師質土器杯 2	
SK3	N - 22° - E	1.22	0.79	0.10	楕円形	土師器手づくね皿 3 土師器細片 50	

遺構計測表8 SD

遺構番号	主軸方向	規模 (m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 2° ~ 10° - W	(10.40)	0.30 ~ 0.80	0.07 ~ 0.20	土師器細片 6	
SD2	N - 9° ~ 14° - E	(7.30)	0.54 ~ 0.77	0.26 ~ 0.33	土師器底部片 1 土師器甕片 1 土師器細片 118 須恵器片 1	
SD3	N - 5° - E	(10.70)	1.26 ~ 1.50	0.32 ~ 0.73	土師質土器皿 3 土師質土器杯 7 土師質土器底部片 6 土師器脚 1 土師器細片 244 須恵器片 6 瓦質土器片 2	
SD5	N - 2° - E	(13.80)	0.49 ~ 0.56	0.08 ~ 0.12	土師器口縁部片 1 土師器杯底部片 1 土師器脚部片 1 土師器細片 56 須恵器片 1 青磁碗片 1 瓦質土器脚部片 1	
SD6	N - 46° - W	(1.92)	0.38 ~ 0.42	0.09 ~ 0.10	-	
SD7	N - 79° - W	(1.02)	0.43 ~ 0.50	0.15 ~ 0.23	土師器細片 9 瓦器片 1	
SD8	N - 59° - E	(9.28)	0.50 ~ 0.65	0.18 ~ 0.24	土師器細片 3	

遺物觀察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
石製品及び鉄製品については全長・全幅・全厚の順にそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色板』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社1995、貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁器』1993を参照した。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
1	SB1 P4	白磁 皿	-	(16)	-	灰白色 *	端反りの口縁部片。口縁端部は外方に開く。	16c
2	SB2 P7	土師質土器 杯	128	40	7.7	橙色 *	内面・外面とも回転ナデ調整。見込みは指によるナデ。底部切り離しは回転糸切りで、板状の圧痕が残る。	15c
3	SB2 P7	土師質土器 杯	119	38	7.4	橙色 *	口縁部は斜上方に延び、端部は丸く収める。内面・外面とも回転ナデ調整で、見込みはロクロ目顯著。底部切り離しは回転糸切り。器壁厚い。	15c
4	P5	瓦質土器 羽蓋	(242)	(49)	-	灰色 *	口縁部下に断面三角形の短い帯が走る。口縁端部は水平な面を成す。内面・外面ともナデ・ユビオサエ。	14c～ 15c前半
5	P23	石製品 石鉢	全長 102	全幅 7.1	全厚 4.1	-	砂岩製。長辺の2か所に挟りが見られる。	
6	SK1	土師器 手づくね皿	93	24	5.7	橙色 *	手づくね成形。内面・外面口縁部は横方向のナデ。他はナデ・ユビオサエ。	
7	SK1	土師器 手づくね皿	98	23	6.6	橙色 *	手づくね成形。内面・外面口縁部は横方向のナデ。他はナデが施される。丁寧な調整。	
8	SK1	土師器 手づくね皿	95	24	6.1	橙色 *	手づくね成形。内面・外面口縁部は横方向のナデ。他はナデ・ユビオサエ。丁寧な調整。	
9	SK2	土師質土器 杯	98	46	5.5	にぶい黄橙色 *	器壁が厚く、口縁部が直線的に斜上方に延びるコップ状を呈する。内面・外面とも回転ナデ。見込みは平行ナデ調整。底部切り離しは回転糸切り。	15～16c
10	SK2	土師質土器 杯	100	39	4.0	橙色 *	口縁部は斜上方に延び、端部は上方に突き出た気味になる。内面・外面とも回転ナデ調整。見込みはロクロ目顯著。底部切り離しは回転糸切り。	15～16c
11	SK3	土師器 手づくね皿	89	26	6.1	浅黄褐色 *	手づくね成形。内面横方向のナデ・ユビオサエ。外面ナデ・ユビオサエ。	15～16c
12	SK3	土師器 手づくね皿	91	27	5.0	にぶい黄褐色 *	手づくね成形。内面・外面とも横方向のナデ・ユビオサエ。	15～16c
13	SK3	土師器 手づくね皿	88	27	5.2	にぶい黄褐色 *	手づくね成形。口縁部直下は内面側に厚磨する。内面・外面ともナデ・ユビオサエ。見込み中心部に径8mmの円環が埋め込まれる。	15～16c
14	SD2	土師質土器 甕	-	(20)	-	浅黄色 暗灰色 浅黄色	甕の口縁部片。口縁端部は内面側に厚磨し、丸く収める。摩耗が著しく調整は不明瞭。	15c
15	SD3	土師質土器 皿	(78)	(16)	(60)	橙色 *	小型の皿。口縁部は斜上方に延び、端部は丸く収める。外面底部と体部の境は凹状になる。摩耗著しく調整は不明瞭。底部切り離しは回転糸切り。	
16	SD3	土師質土器 皿	79	15	4.9	橙色 *	小型の皿。口縁部は斜上方に延び、端部は丸く収める。摩耗が著しく調整は不明瞭。底部切り離しは回転糸切り。	
17	SD3	土師質土器 杯	(143)	(33)	(7.4)	橙色 *	口縁部は緩やかに斜上方に延び、端部は丸く収める。内面・外面とも回転ナデ調整。摩耗著しく調整は不明瞭。	15c前半
18	SD3	土師質土器 杯	(166)	(34)	(9.0)	にぶい黄褐色 *	口縁部は直線的に斜上方に延び、端部は丸く収める。内面・外面とも回転ナデ調整。底部切り離しは回転糸切り。摩耗著しく調整は不明瞭。	
19	SD3	土師質土器 杯	(154)	(45)	(8.8)	橙色 *	口縁部は直線的に斜上方に延び、端部は丸く収める。摩耗著しく調整は不明瞭だが、内面・外面とも回転ナデ調整。底部切り離しは回転糸切り。	
20	SD3	土師質土器 杯	(139)	(43)	(7.9)	浅黄褐色 *	口縁部は直線的に斜上方に延び、端部は丸く収める。内面・外面とも回転ナデ調整。底部切り離しは回転糸切り。摩耗著しく調整は不明瞭。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
21	SD3	土師質土器 杯	14.5	5.7	6.7	にぶい黄褐色 *	口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。外面底部と体部の境が部分的に段状を呈する。内面・外面とも回転ナデ調整。底部切り離しは回転糸切り。	
22	SD3	土師質土器 杯	-	(16)	4.1	橙色 浅黄褐色 *	杯の高台部、外面は回転ナデ調整。底部切り離しは回転糸切り。	
23	SD3	土師質土器 杯	-	(28)	(5.7)	にぶい黄褐色 * 浅黄褐色	見込みは凹状を呈する。外面底部と体部の境が凹状になる。摩耗著しく調整は不明瞭。	11c
24	SD3	土師質土器 碗	-	(1.7)	7.0	浅黄褐色 * *	底部中央に径2～2.5cmの焼成後穿孔が見られる。底部切り離しは回転糸切り。	11c 後半 ～12c
25	SD3	土師質土器 皿または碗	-	(1.7)	6.2	橙色 にぶい黄色 黄灰色	底部片。摩耗著しいが底部に回転糸切りの痕跡が残る。	平安末
26	SD3	瓦器 碗	(14.0)	(1.5)	-	灰黄色 灰色 灰黄色	口縁部片。口縁端部は丸く収める。器面はナデ・エビオサエ、和泉型。	13c
27	SD3	白磁 碗	-	(1.4)	-	浅黄色 灰黄色 *	底部片。内面に乳白色の釉薬が施される。外面は露胎する。高台裏の残存部に2か所の抉りを有する。	D類 15c 後半
28	SD5	土師質土器 碗	(14.4)	(2.6)	-	褐灰色 灰青褐色 淡棕色	口縁部は緩やかに外反し、端部は外面側に厚直し丸く収める。摩耗著しく調整は不明瞭。	12c
29	SD5	青磁 皿または碗	-	(2.7)	-	灰オリーブ色 * *	体部片。内面・外面に灰オリーブ色の釉薬が施される。内面に劃花文。	
30	包含層	土師質土器 杯	(13.4)	(4.4)	(2.7)	黄褐色 にぶい黄褐色 棕色	口縁部は斜上方に延び、端部は丸く収める。内面・外面とも回転ナデ調整。見込みは指によるナデ。	
31	包含層	鉄製品	全長 14.2	全幅 2.8	全厚 0.8	-	扁平な棒状で、一方は匙状で、他方は鑿状に尖る。重量76.0g	

写真図版



遺構完掘状態(南東上空より)

図版2



調査前風景(北東より)



調査前風景(南西より)



遺構検出状態(南東より)



遺構検出状態(西より)

図版 4



遺構完掘状態(東より)



遺構完掘状態(上空より)



遺構完掘状態(南東より)



遺構完掘状態(西より)



調査区北壁セクション(南西より)



調査区東壁セクション(北西より)



SK1 検出状態(北より)



SK1 土師器手づくね皿(6~8)出土状態(南より)1



SK1 土師器手づくね皿(6~8)出土状態(南より)2



SK1 完掘状態(北より)



SK2 セクション(南より)



SK2 土師質土器杯(9・10)出土状態(南より)1



SK2 土師質土器杯(9・10)出土状態(南より)2



SK2 完掘状態(北より)



SK3セクション・土師器手づくね皿(11～13)出土状態(南より)



SK3土師器手づくね皿(11～13)出土状態(北より)



SK3土師器手づくね皿(11～13)出土状態(南より)



SK3完掘状態(北より)



SD1 a - a'バンクセクション(南より)



SD2 b - b'バンクセクション(南より)



SD3 a - a'バンクセクション(南より)



SD3 b - b'バンクセクション(南より)



SB2 P7 土師質土器杯(2・3)出土状態



P5 瓦質土器羽釜(4)出土状態



SD3 土師質土器皿(16)出土状態



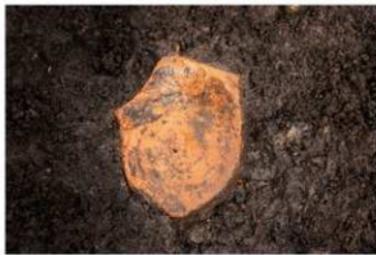
SD3 土師質土器杯(19)出土状態



SD3 土師質土器杯(21)出土状態



SD3 土師質土器椀(24)出土状態



SD3 土師質土器皿または椀(25)出土状態



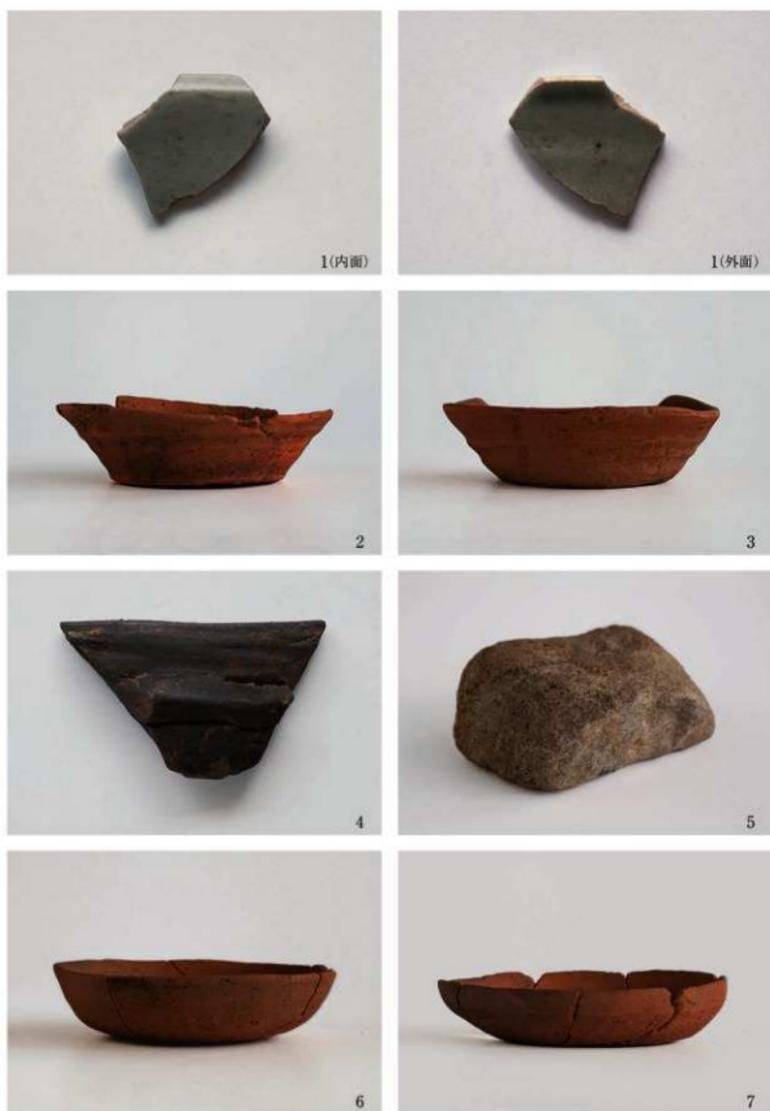
SD5 青磁皿または碗(29)出土状態



試掘トレンチ4北壁セクション(南より)



試掘トレンチ4完掘状態(南東より)



SBI・2、P5、P23、SK1 白磁(皿)、土師質土器(杯)、瓦質土器(羽釜)、石製品(石錘)、土師器(手づくね皿)



SK1 ~ 3, SD2 土師器(手づくね皿)、土師質土器(杯)、土師質土器(甕)



SD3 土師質土器(皿)、土師質土器(杯)



SD3 土師質土器(杯)、土師質土器(碗)、瓦器(碗)



SD3・5 包含層 白磁(碗)、土師質土器(碗)、青磁(碗・皿)、土師質土器(杯)、鉄製品

報告書抄録

ふりがな	やましたいせき							
書名	山下遺跡							
副書名	香南市新庁舎建設基本設計に基づく周辺駐車場整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	横山 藍							
編集機関	香南市文化財センター（香南市教育委員会）							
所在地	高知県香南市香我美町山北1553-1							
発行年月日	2019年12月27日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山下遺跡	〒781-5213 高知県 香南市野市町 東野タノ丸	39211	20028	33° 33′ 53″	132° 42′ 6″	2018.2.14 ～ 2018.3.26	226㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
山下遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物 構列 土坑 溝 ピット	2棟 1列 4基 7条 55個	土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 質土器 貿易陶磁器 鉄製品 石製品	11～12cを中心とする溝跡と15～16cの掘立柱建物跡と土坑が検出された。土坑には2または3点の土師器手づくね皿、土師質土器杯が埋納されていた。		
要約	<p>山下遺跡は香長平野の北部、金剛山(三宝山)を含む伏葉山地の南西麓、野市台地の中央部に位置する。主な遺構は、1期は11～12世紀を中心とする区画溝、2期は15～16世紀の掘立柱建物と土坑が挙げられる。土坑からは微細な骨片と副葬品が出土し、土坑墓(原敷墓)の性格を持つ。土坑墓が造成された以降の遺物は発見されておらず、耕作地として現代まで使用された。</p>							

高知県香南市発掘調査報告書第15集

山下遺跡

香南市新庁舎建設基本設計に基づく周辺駐車場整備事業に伴う発掘調査報告書

2019年12月27日

発行 高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター

高知県香南市香我美町山北1553-1

Tel. 0887-54-2296

印刷 半田印刷